

日本バプテスト連盟広島教会資料の 価値と力¹

金丸英子

はじめに

日本バプテスト連盟広島キリスト教会（以下「広島教会」）は、2019年6月に『記念誌 宣教100周年～信仰・希望・愛～』（以下『記念誌』）を刊行した。播磨聡牧師と4名の教会員から成る「宣教100周年記念委員会記念誌編集委員会」によるもので、総頁259頁の力作である。最終頁に宣教100周年記念委員会委員長の「ご挨拶」と並んで編集委員会委員長の「編集後記」がある。それによれば、1年間におよぶ編集作業は「教会の歴史を振り返るとともに、自分の人生をも振り返り、未来を思考する機会」となったと記し、次のように続く。

広島教会に残されている膨大な資料に播磨聡は取り組み、高木茂登は写真を隈なく調べて、整理展示し、編集委員会で選択していくという作業をした。それにして、教会にこれだけの資料が整理され、保存されていたことは驚きだった。

（傍点筆者）

編集委員会を驚かせたその「膨大な資料」がこの記念誌を生み出したことは明らかである。教会資料の収集と保管の重要性について『教会アーカイヴス入門』（いのちのことば社、2010年）は、「教会史は、教会に下された恵みを私たちが確認し、宣教方向を展望するために重要です。教会史によって、過去を振

1 恵泉バプテスト教会「社会部通信」第347号（2023年8月20日）の掲載記事の原稿に加筆・訂正したもの。

り返り過去からまなび、また過去を直視し、教会の歴史と活動を共有することによってはげまされたいとおもいます (25頁)。・・・教会史のために教会資料を使う、それは日常の資料管理がなされて初めて可能です (35頁)」と述べるが、広島教会資料の価値と力もそこにあり、『記念誌』はその教科書的なものである。特に、「第7章 教会の年譜」,「第8章 資料」に、地道に蓄積された資料の力が遺憾無く発揮されている。とりわけ、第8章「4. 歴史的な重要な資料」は第一級の歴史資料と言ってよい。内訳は、現存する最古の資料(1925年の教会員送籍書)、現存する最古の週報(1937年1月3日)に始まり、(7)宗教団体法に基づく地方官庁への教会報告(1942年)、(8)国民儀礼(宮城「現皇居」遥拝)が初めて礼拝で行われた当日の週報(1943年1月2日)、(9)聖旨奉戴集会のプログラム(1943年4月12日)、(13)日本基督教団離脱承認申請書(1947年4月30日)、(14)米国南部バプテスト連盟の1万ドルの献金報告(1948年4月27日)などである。この「膨大な資料」は、『記念誌』誕生を可能にした資料群とともに、戦前・戦中の歴史を生きた教会の姿と教会員の意識や息遣いを伝えている。

1. 広島教会資料の内訳

西南学院は、この貴重な広島教会資料をデジタル化して学院史資料センターに所蔵する機会を得た。その資料群には1937～40年の週報と毎月の会計報告(231枚)、1941～1944年の同資料(195枚)、宗教団体法に基づく地方長官への年次報告書(6枚)、日本基督教団合同感謝献金の呼びかけ(1枚)、日本基督教団戦闘機奉納献金の呼びかけ(1枚)、牧師木村文太郎(以下「木村」)から教会員に宛てられた自身の戦時宗教者産業動員応召の説明(1枚)、戦時中に広島市基督教連盟が開催した戦争協力を鼓舞する諸集会の案内チラシ(9枚)、教会史略(14枚)、教団離脱申請書(4枚)が含まれている。それらのガリ版資料のインクの色、鉄筆の筆致、週報の構成と文字の大きさ、年々粗雑になる紙質は当時の教会の空気を伝えている。これこそが現物資料に接する醍醐味であり、資料に関する「報告」以上の何かを伝えて余りある。

2. 「週報」の資料価値

資料の大部分は週報である。すでに述べたが、その中には前奏直後に「国民儀礼」が設けられた礼拝の週報の他、礼拝で国歌斉唱が行われた特別記念集会の週報など、天皇制を反映した諸集会の姿を伝える貴重な資料が含まれている。これらについては文献から知識として得てはいたが、今回は資料で裏付けができた。それに加え、週報全体に目を通すと、式次第以外の部分（当日の集会人数、夕礼拝の説教題、会員消息、教会の来訪者名、市内の超教派の集会案内など）も記され、教会の中で静かに芽生えつつあった戦争協力へのしるしを読み取ることもできた。そのために、筆者は圧倒的な分量の週報に資料価値を見出す。それが、当時の信仰者と教会が「宗教報国」、「信仰報国」を大義名分に掲げ、キリスト教の名の下に当時の天皇制ファシズムを支え、「天皇の臣民」として帝国主義と戦時体制を銃後から、それも忠実に支えた教会の日常を映し出しているからである。

日本近代史研究者の吉見義明は、自著『草の根のファシズム：日本民衆の戦争体験』（岩波現代文庫、2022年）で、被害者でありつつ同時に加害者でもあった民衆の戦争協力を論じている。広島教会の週報群は「天皇制ファシズムが民衆の意識をおおう時代」（東京大学教授加藤陽子による上掲書の解説「民衆の意識を研究史に刻む」312頁）に発行され、そこには、礼拝説教、集会案内、個人消息、諸報告やその他の記事が几帳面に記されている。吉見の主張を借りれば、当時の教会にキリスト教版「草の根ファシズム」というものがあり、それはひとり広島教会だけではなく、日本のキリスト教界全体（特にプロテスタント）に見られたと言ってよい。その意味では、教会も被害者であると同時に加害者でもあった。広島教会の週報群はその一端を垣間見せる貴重な資料である。

3. 週報： 教会の日常に軍靴の響きを伝える媒体

広島教会の戦争への道は、1937年2月の週報の「諸報告」欄の、当時の牧師天野栄造（木村の前任者、以下「天野」）の満州伝道の準備報告に始まる。天野はバプテスト西部組合（現日本バプテスト連盟の戦前の組織）の最初の「海外」宣教師として満州へ送り出され、大連で教会組織に漕ぎ着けた人物であった（これについては、拙筆「天野栄造による西部組合の満州伝道と満州伝道会に関する一考察：日本基督教団加盟との関連から」〔西南学院大学神学論集、2014年〕で述べているので、ここでは割愛する）。それ以後、週報は天野の満州視察報告を度々掲載し、翌月下旬の週報には天野の満州伝道を支える教会献金の要請が掲載された。

ここから推測できるのは、アジア・太平洋戦争へとつながる当時の国策と、自分たちの牧師の海外伝道への献身、並びに教派団体の伝道活動の拡張に対する祈りと支援が抵抗なく結びつけられているということである。教会も両者の関係をそのように解釈し、受け入れていったのではないか。すなわち、広島教会に宗教者としての「報国」の念が芽生え始めていたということであり、それはひとり広島教会だけではなかった。西部組合が1937年次総会で挙行した天野による日本のバプテスト最初の海外伝道師就任式で、組合指導部は「満洲国は我が日本の生命線である。第一・国防生命線、第二・経済生命線、第三・人格生命線であって、第一は軍当局に、第二は経済家にゆだね、第三人格生命線には我等宗教者たるものが赤誠を以て協力ご奉公する」（『日本バプテスト連盟史1889-1959』、433頁）と述べ、時局の帝国主義的な用語を駆使し、宗教者として「赤誠のご奉公」に励むよう勧めているからである。

同年8月1日の週報に教会員の出征が初めて報告される。以後、それに準ずる報告が集案案内等の教会報告に混じって、「個人消息」扱いで当然のように発信されるようになる。並行して慰問袋の作成による戦争への「応援」、戦地の教会員への激励の手紙書き、「基督者軍人」という呼称、地域の超教派連合主催の「非常時局」のための祈祷会出席の勧めが続く。翌年（1938年）の春には、「靖国神社臨時大祭に就き、一分間護国の英霊のため」の黙祷を教会員に求め

るまでになっている。さらに、国家神道に絡めた時局の方針をキリスト教の立場で援護する興亜奉公日祈祷会、奉祝皇紀2600年（1940年）、紀元節奉祝礼拝、報国総員礼拝、戦争完遂祈祷会、大詔奉戴日記念祈祷会、明治節奉祝総合礼拝、聖旨奉戴連合祈祷会、大詔渙発3年記念必勝祈願連合礼拝等の開催、木村による「前進する皇国」、「一億一心の根本義」と題される説教題が掲載され、天皇制とキリスト教の結びつきが時局の言説と共に頻繁に文字にされた。このようにして週報は、近づきつつある軍靴の響きを教会に伝える媒体の役割を果たした。

4. 「報国」に勤しむと教会と教会員

以上のような姿勢を正当化した要因は、「戦時国民精神生活の現状を思い、ますます信仰人としての宗教報国」の燃えるような念（1942年4月5日週報）としての、キリスト者の「信仰報国」の使命であった。その底には、1941年の日本基督教団創立に体现された日本的な性格を帯びた「日本基督教」の樹立と確立（1942年10月18日、12月6日週報など）への希求がある。そのため、教団の成立は「世界基督教史にあって見ざる栄光のある事業」（1943年2月28日週報）を日本の基督教が達成した自負と誇りとして受け止められ、礼拝式次第で祈祷や聖書朗読に先立って「国民儀礼」（宮城遥拝）が来ることに違和感がなかったのは当然である。なお、礼拝で「国民儀礼」が常態化するのには、日本基督教団が政府の認可を得て正式に設立され、バプテストもその第4部に位置するようになって以降のことである。

この翼賛的な組織に連なった広島教会の喜びは尋常ではなく、「重要 左記のごとく、我ら教団は文部省より24日づけにて正式に認可された。日本キリスト教の歴史を回顧し、また…感慨に堪えず。神国建設に信仰報国に邁進すべし。それと共に日本に80年の歴史を有する『バプテスト』の名も消され、教会も新名称によることとなりたり。」と報告し、週報の最後部分に通常よりも数倍大きな字で「日本基督教団24日付正式に認可さる。感謝に堪えず！！」と報じた。元来このスペースは、クリスマス、聖霊降臨日、総会の告示など、教会の重要

な行事予告のための特別なスペースであったが、皇紀2600年の奉祝礼拝の週報には、これも大きな文字で「奉祝皇紀2600年の佳節」が掲載されるスペースとなった。こうして教会は「皇国と共に進み」、「皇国と一体となって」、「皇国の教会」となる道（木村から教会員宛「戦時宗教者産業動員となる覚悟の説明」）を選ぶに至る。国民全体がそれぞれの持ち場で戦争完遂のために艱難辛苦を舐める中（戦域報国）、教会と信仰者は、キリスト教による「宗教報国」、「伝道報国」を以って戦争協力へとつき進んでゆき、それが毎月の会計報告、集会報告、清掃当番、個人消息に混じって教会の日常として記載される。

5. 「宗教報国」に後押しされた教会生活

以上のような戦時色が色濃く漂う報告や表現を除けば、週報は今日の我々のそれと同じように普段の教会の様子を淡々と伝える。広島教会は非常時も平時と変わらずクリスマス礼拝、バプテスマ式、結婚式、主の晩餐式、教会学校、特別集会を行っている。主日礼拝の出席数が一桁に低下しても、主日の2度の礼拝（午前中の礼拝は徴用による工場勤務の木村に代わり執事が説教を担当し、夜は帰宅した木村が礼拝を担当し、この礼拝で晩餐式を行った）、祈祷会、聖書研究が戦中を通じて途絶えることはなかった。また、教会史や教理史に明らなかった木村は、その分野の連続講義も行なっている。

広島教会の牧師と教会員、教会員同士の交わりは密で濃いものであった。教会員の教会に対する愛着は深く、教会とその働きに対する忠実な姿勢は戦時下に於いても終始一貫していたように思える。それは、戦地からたびたび届く教会員の兵士の近況報告、その者たちからの教会献金報告などにも見られる。兵卒として異国の地にある教会員にとっては、家族とともに教会が故郷であり、守らねばならない存在となっていたのであろう。そのような仕方教会（国内）と戦争（戦地）は繋がっていた。このような教会員の教会に対する愛情は、戦後の教会復興に対する速やか結束と取り組みを可能にしたと思われる。戦後の早い時期に教会の集会は再開され、それを通して福音が語られて、地域の人々の戦後の精神的飢餓を満たしたであろう。

戦時下、残された教会員たちは防空演習、空襲警報、防空警報で集会場所と集会時間の変更を余儀なくされながらも、礼拝をはじめとする教会の諸集会を続け、週報を発行し続けた。木村は「戦時宗教者産業動員」に従事する傍ら、伝道と牧会に忠実に励み、既述したように昼間の工場勤務を終えた疲れた体で夕礼拝を行い、祈祷会、聖書研究を休むことはなかった。『記念誌』には、その木村が家族を青森に疎開させ、原爆投下直後から徴用先の工場から市内の救済作業に赴き、のちにはそのために自らも残留放射能を浴びた入市被爆者と認定されるも、爆風で倒壊した教会堂に戻って来て、教会員有志と一緒に瓦礫撤去に汗を流したとある。そのあたりは、『記念誌』に詳しい。ここに、できる限りの犠牲を払って教会を守り支えた牧師と教会員の姿を見る思いである。しかしそれとても、その底に「宗教家たるもの赤誠を以て協力ご奉公する」という「宗教報国」の熱心があったとすれば、いかに犠牲的な献身であったとしても、一概にそれを全面的に肯定することに抵抗を感じもする。当時、そうではないキリスト者もいたからである。日本基督教団に属していたホーリネス系の牧師達は、信仰のゆえに精神的・肉体的迫害を受け、教会解散の脅威にも瀕したが、日本基督教団指導部はその人たちを庇うことはなかった。

6. 戦時下の当事者の苦悩

しかしながら週報には、時局の渦中にあった教会員の内心も記録している。「時局下、…教会を死守する」(1944年9月10日週報)、「皇国隆発の…重大な時局下…特別大集会もできず牧師は産業動員されて工場に働きつあり。故にささやかに教会存立の恵みを神に感謝し、信仰人として最善の奉仕のできるように覚悟を決めてください」(同10月1日週報)などである。「教会の存立と死守」、「宗教報国」、「信仰報国」、欧米の影響を脱する「日本的な性格を帯びた基督教(日本的キリスト教)」の樹立と確立に対する理想と使命とが渾然一体となっており、これは「臣民たる基督者」の偽らざる声であろう。広島教会はその負の歴史を葬ることなく、そのままを資料として残している。戦後、教会もその負の記録を葬り去ってはいない。

戦後の早い時期、広島教会は1948年に新会堂献堂式を記念して、青年会編纂による『教会略史』（1948年10月2日）を出したが、それが今回の広島教会資料に収められている。そこには、戦時中の教会のあり方に対する批判や反省、当時の牧師の説教に対する客観的な感想がある。1948年と言えば、戦争が終わり、自由な時代が開けたとは言え、戦争の記憶と戦禍の爪痕が生々しく残っていた時期でもある。そこに読み取れるのは、戦時下、意識ある教会員は当時の国体信仰と基督教信仰の矛盾、および両者の不可避の対決を認識しており、この度の戦争が「世界史的基督教的立場よりすれば戦争の理由は認められない」ことに気づいていたということである。

以上のような「釈然としない苦悶」を抱きながらも、「この戦争を合理化したいという意図」が存在し、「この点において教会が戦争に協力したこと」の「明瞭なる事実であったと言わねばならない」とまで述べている（『教会略史』、11～12頁）。木村も「詫び」という表現で、自身もまた同様な認識を持っていたと思わせる記録もある。確かに信仰の名の下に戦争を合理化し、協力した事実は消せない。しかし問うべきは、そうまでして存続させ、守りたかったこととは「何か」であろう。何が、何故「戦争の合理化」を求めさせたのか。これは、解明されなければならないきわめて重大な問題である。

広島教会も木村も戦争協力の自責の念を持っていた。だからこそ、戦後アメリカから紹介された民主主義が社会で喧伝される中、その「民主主義的傾向を直ちに謳歌するものではなく、ふかい宗教的反省の苦悶でもあらねばならなかった」と反省と自責の念を述べ、その上で、戦後は「地の塩、世の光たる基督者自身と基督教的良心…基督者たるわれわれは毅然として永遠の神の支配を信じて立つ…」と明言し、世界平和のため信仰の自由と独立を旗頭とする広島バプテスト教会「たる決意で、『教会略史』は結ばれている。

連合艦隊旗艦「大和」を建造した呉を擁する軍都広島市にあり、戦前、戦中を通して中四国地方のキリスト教界で中心的な役割を果たした広島教会。宗教報国、信仰報国に勤しんだ広島教会。原爆投下によって教会員を失った広島教会。その広島教会の戦後の固い決意がどう具現化したかについて筆者は論じる準備もなければ、その立場にもない。ただ以下の事実は伝えておきたい。2018

年10月に63歳の若さで天に召された神学部の故天野有先生は、ご遺族によれば、定年退職後は広島に戻りたいと言っておられたと言う。また神学部の濱野道雄先生は、「聖書から、広島から、私は世界を見ます」(『記念誌』97頁)と記している。両者は親御さんの代からの広島教会の関係者である。『教会略史』結語の覚悟はそのようにして、今日まで関係者に受け継がれているとも言える。

結びにかえて

筆者は広島教会資料と出会うことで、日本的キリスト教の持つ問題性とその今日的な挑戦、宗教とナショナリズムの結びつきに関する問題意識を掻き立てられた。また、今も教会と信仰者にあるかもしれない、「模範的な国民」、「模範的な市民」の信仰者の自負としての「従順」。「模範的な教会員」たることを暗黙裡に求める聖書の読みや説教。「教会（または教派組織）に対する奉仕と協力」を謳うことで「信仰にある一致」を無言のうちに求める同調圧力に似た空気の漂いに気づかされ、その正体を考える。

バプテスト研究の学徒としては、「信徒の教会」を任じ、それを自負もする我らバプテストの信仰的特質の中に、「草の根のファシズム」なるものが巢食うリスクのあることも思い当たる。同時に、そうならないための「蛇のように聴く、鳩のように素直」な信仰はどこを基点として・どのように養われるのかという挑戦もある。広島教会資料は「これらの課題をどうするのか」と問うて止まない。広島教会資料が沈黙の内に指し出すこれら問題の深刻さとその根の深さは、他人事、70有余年前のことでは片付けられない今日的な課題であることは確かであろう。その意味で、筆者は、一人でも多くの方々が広島教会資料の存在を知り、それを読んでいただきたいと願っている。また、一つでも多くの教会が広島教会に倣って、自らの教会の資料の発掘と収集、保管の重要性に目覚め、取り組みの一步を踏み出していただきたいと願っている。